

- [「ふくしま」から福岡へ\(鈴木庸裕\)](#)
- [第6回全国大会\(福岡市\)を終えて\(門田光司\)](#)
- 課題別研究分科会報告
  - [第1分科会:拠点巡回型メリットを活用した非行問題へのソーシャルアクション\(奥村賢一\)](#)
  - [第2分科会:「児童虐待対応、スクールソーシャルワーカーに何ができるのか\(山野則子\)](#)
  - [第3分科会:大学におけるキャンパス・ソーシャルワークの現状と展望\(名城健二\)](#)
  - [第4分科会:スクールソーシャルワーカーの効果的活用のための工夫と課題をさぐる\(清水克修\)](#)
- [シンポジウムを聞いて\(1\)\(帖佐加代\)](#)
- [シンポジウムを聞いて\(2\)\(横山明希\)](#)
- [全国大会に参加して\(中筋啓介\)](#)

### 「ふくしま」から福岡へ-大会の御礼 鈴木庸裕(福島大学・大会長)

無事第6回大会を終えることができました。大会事務局長の門田会員をはじめ、会場となった西南学院大学、そして九州・沖縄部会の会員諸氏のご尽力を頂き、盛会に2日間を終えることができました。御礼申し上げます。いつの日か、大災害を乗り越えた東北・福島の地で、九州・福岡への恩返しとして、全国大会をお引き受けできるよう努力したいと思います。様々な面でSSWの真価が問われる被災地を背負いつつも、新たな実践的提起ができるよう、全国からの支援をいただきながら「教育復興」「人間復興」をめざしたいと思います。

2012年度の第7回大会は、香川県善通寺市の四国学院大学を会場に、7月7日・8日に開催されます。追って本会報の次号で、その詳細をご案内します。ご期待ください。

### 第6回全国大会(福岡市)を終えて 門田光司(福岡県立大学・学会代表理事)

第6回全国大会が西南学院大学(福岡市)を会場とし、平成23年11月19日(土)・20日(日)に開催された。当初は、7月に福島大学での開催予定であったが、東日本大震災の状況より理事会で協議し、福岡県で開催することとなった。大会テーマ「学校づくりにおけるスクールソーシャルワーカーの役割」及びシンポジストについては福岡大会の内容を引き継ぎ、大会長も鈴木庸裕氏にお願いした。一方、福岡市での開催を受けて、基調講演では福岡市教育委員会理事・久池井良人氏にお願いをし、事務局体制も福岡県のスクールソーシャルワーカー(以下、SSW)を中心に、九州地区の世話人等に支援をいただいた。

大会1日目は、午前基礎研修と専門研修を開催した。基礎研修では、現任のSSWである岩永靖氏と荒巻智氏を講師に派遣型と直接支援型の効果的な活動について講話をいただいた。また、専門研修では野田正人氏によるケース検討のワークショップが開かれた。いずれも熱気ある研修となり、研修修了者には修了証書をお渡しした。

午後の久池井良人理事による基調講演では、

「学校づくりにおけるスクールソーシャルワーカーへの期待」をテーマに、福岡市での「新しいふくおかの教育計画」における概要と、SSWの導入成果及び今後の課題について述べられた。

引き続きシンポジウムでは、鈴木庸裕氏より発題「学校ソーシャルワークにおける学校づくり論をめぐって～震災復興の道筋の中で～」を、山下英三郎氏より発題「学校の再生とスクールソーシャルワーク」について述べていただいた。ただし、各氏の発題に対し、限られた時間内で論点整理をするには困難さがあり、今後も継続的議論をしていく必要のあるテーマと考える。私見では、学校において教育機会が奪われていく子どもたちを包摂した学校づくりに向けて、SSWがどのような役割を担っていくかが論点かといえる。大会1日目の夕刻より情報交換会が開催され、100名近い参加者であった。恒例となった各地のSSWに自己紹介に加え、今回は「スクールソーシャルワーカーみんなでがんばろう!」という趣旨より福岡県・佐賀県・長崎県のSSWダンシングチームによるAKB48のダンス披露があった。広島市SSWのミニ余興もあり、感謝!感謝!である。

大会2日目の午前は16本の自由研究発表がなされた。今回は事前に自由研究発表の審査を行わなかったが、今後は事前審査を行っていくことも必要かと考える。午後からの課題別研究では「非行」「児童虐待」「大学でのキャンパス・ソーシャルワーク」「SSW活用事業」をテーマに4つの分科会が開催された。テーマにより各分科会の参加者人数にばらつきがあったが、今回の課題別研究では学会員のニーズを聞き取っていくことも大切かと感じた。

以上、2日間で延べ210名の参加者があったが、会場対応をしていただいた安部計彦氏と大会当日お手伝いをしていただいた西南学院大学及び福岡県立大学の学生にみなさん、そしてスクールソーシャルワーカーの皆さんにはお礼を申し上げます。

## 課題別研究報告 第1分科会 拠点巡回型メリットを活用した非行問題へのソーシャルアクション —福岡市における地域に根差した学校ソーシャルワーク実践— 奥村賢一(福岡県立大学)

### はじめに

内閣府(2010)『少年問題等に関する調査』では、少年非行の増加を実感する回答が全体の約75%に上った。また、対象児童生徒の印象については、「保護者が教育やしつけに無関心である」、「家庭にも学校にも居場所がなく孤立している」、「保護者などから虐待を受けたことがある」などが回答の多くを占めており、当事者の生活までを視野を入れた直接的支援の必要性が考えられる。併せて、それらは学校(教職員)による取り組みだけでは限界があることも推察できる。

そこで本分科会では、福岡市教育委員会のスクールソーシャルワーカー(以下、SSW)梶谷優子氏、山崎千栄子氏、池田敏氏より、学校配置型の一形態である拠点巡回型のメリットを効果的に活用した支援のあり方について、非行事例からの実践報告が行われた。

### 1. 校内支援体制の構築による非行問題への取り組み(山崎氏)

家庭との連携不足により断片的な情報から学校側が対象生徒や保護者に対して偏った見立てが行われ、それにより支援が停滞している事例の報告が行われた。SSWはそれらを改善する取り組みとして、学校を拠点にケースマネジメントの手法を用いた支援を展開し、ケース会議における目標設定では、一時的な学校適応に着目するのではなく、将来的な社会適応を見据えて犯罪予防や社会的自立へと視野を広げ、そこから学校(教職員)が行うべきことを検討した。個別支援計画で設定されたSTEP1～STEP4までの具体的な支援内容に基づき、明確な役割分担からチームアプローチを実践して改善を図り、このことが新たな校内支援体制の構築に向けた基盤となった。

### 2. 非行予防に向けた家庭と学校の関係修復(池田氏)

集団不適応を起こす対象児童の非行予防という観点から事例に着目して、家庭と学校間の不良な関係性にSSWが直接的な支援介入を行い、その関係修復から状況改善が図られた事例の報告が行われた。継続的なアセスメントの結果、児童の粗暴な言動の背景に、キーパーソンである母親の影響が確認され、その母親の学校への強い不信感と学校(教職員)側の母親に対する否定的評価が事態の悪化を促進している状況が明らかとなった。SSWはアドボカシー活動を中心に媒介的役割を果たし、肯定的フィードバックによる互いの評価変容から協働関係へと発展させることに成功した。孤立傾向にあった家庭の問題悪化を防ぐとともに、家庭と学校の関係性を活用した支援の有効性を示した。

### 3. 関係機関との連携を中心とした家族支援(梶谷氏)

学校・地域・関係機関の連携が十分に機能していない課題から、それらの改善が家族支援において有効な社会資源となり一定の効果が示された事例が報告された。対象生徒・家族に対しては、過去より関係諸機関や地域住民が関与してきたが、状況改善へと導かれることはなかった。その要因の一つに、各々の取り組みの独立により横断的ネットワークとして機能していない実情があった。SSWは日常的にインフォーマルな活動を展開し、学校や関係機関だけでなく地域住民を含めたネットワークを行い、問題を抱える児童生徒を生み出さない地域づくりを目指した。これらの連携が事例においてもセーフティネットとして機能したことで対象生徒・家族が抱える課題が改善へと導かれた。

### 4. まとめ

ソーシャルワーク実践ではマクロレベルに位置づけられる「ソーシャルアクション」であるが、マクロに内包される形でメゾ、ミクロレベルは存在する。全国的には派遣型が主流であるわが国の学校ソーシャルワークにおいて、拠点巡回型を採用する福岡市での取り組みは、児童生徒に寄り添った個別支援だけでなく、教職員の一員としてチームアプローチに参画するなど校内支援体制の一翼を担う。また、地域に根差した形で関係機関等と協働してインフォーマルな社会資源を開発し、児童生徒を取り巻く問題の早期発見・未然防止においても一定の有効性を示している。一方で、直接的支援が可能であるがゆえに個人情報取り扱いに関する組織的な取り決めや派遣型SSWにおける同様事例での検証等を含めた課題についても確認することができた。

## 課題別研究報告 第2分科会

児童虐待対応、スクールソーシャルワーカーに何ができるのか  
—児童相談所、市町村とは違う役割からの可能性—  
山野則子(大阪府立大学)

今回の本企画は、スクールソーシャルワーク(SSW)活用事業が始まって、4年目に入り、さまざまな形で全国に拡充してきた今、基本的な児童福祉との関連—共通点や違い—を確認したり認識したりする議論が必要ではないかと思ひ企画したものです。それはあちこちで聞かれる声から、気になったという点でもあります。児童相談所と学校の不協和音、そのなかでスクールソーシャルワーカー(SSWer)がどのような位置をとるのか、〇〇が動いてくれない、〇〇に任せきりと嘆く声、あるいはSSWerが児童相談所のパーツのように動くのか、またSSWerが児童相談所や市町村児童相談部署を子どもや学校の代弁者として攻撃してくる、などです。

もちろんそれぞれ事情があり、展開の方法は各事象によって違ってくると思いますが、ではそもそも児童相談所のように措置権もない、福祉事務所や市町村子ども相談課のように気軽に利用できるサービス制度も持っていない、SSWerに児童虐待問題に何ができるのでしょうか。児童相談所あるいは教師が忙しいからその仕事を肩代わりするのが仕事でしょうか。この大会の2週間後に開催された日本児童虐待防止学会の大会でも同じ議論になりました。実は、簡単なこと、当たり前のように思っていることですが、しっかり議論する必要があるのではないかと思います。

その第一歩に、SSWerは児童福祉をベースにしているソーシャルワーカーの一種であるにもかかわらず、まとまって児童相談所のことや市町村児童福祉体制のことを法律も含めて聞くことは意外にも機会がない、学校をベースに考えすぎている可能性があるという点の打開から取り組むことにしました。

児童相談所の立場から、福岡市の河浦龍生さんから児童相談所の児童虐待における相談体制や仕組みなど話していただきました。皆さんが最も驚かれたのは、児童相談所は相談ケースの10%未満しか施設措置できていないという事実でした。これはもちろん全国データでも同じです。学校からは、全校児童数のうちの1%未満の子どもたちを児童相談所に送るわけですから、措置されると当然思ってしまう、この数字の違いがまさに認識のずれになっていきます。

市町村児童相談の立場からは、福島史子さんが市の相談体制や要保護児童対策地域協議会の実態のお話をいただきました。かなり学校と連携をしている、地域密着で支援が緻密にできる家庭児童相談室であっても、教育委員会や学校側にいるSSWerとは違う、家児相がいるからSSWerは不要という考えにはならないという提起をいただきました。

ではその内容は何かということ、一例として市の児童相談部署よりもさらに緻密に児童虐待の早期発見、発生予防に関わることのできる例として、SSWerの動きの一例を和歌山県湯浅町SSWerの上田さとみさんにお話しいただきました。学校支援の家庭教育支援のサポーターとトチームを組んで、情報誌を作成し数か月に一度、義務教育年齢の子ども家庭に全戸配布しており、そこから気になる事例がピックアップされる仕組みを作っているというものでした。つまり、学校にいる子どもたち全員を視野に入れることができ(SSWerが1人1人会うという意味ではないです)、そこからスクリーニングする、その仕組みを作っていらっしやうという例です。これは全数把握の部署ではないという意味がないし、それができるのは乳幼児期の保健所・保健センターと就学後は学校しかないかもしれないという点に着目しました。

もちろんSSWerにはさまざまな役割があり、地域の実情も違うでしょう。しかし、すべての子どもを視野に入れることができ早期に対応できる、あるいは関わりの困難な事例を初期にうまくつなぐことができる可能性、そのことによって困難さも問題も未然防止、あるいは軽度にする事ができる可能性があるのではないのでしょうか。そのためには、他機関の限界を認知しておくこととともに、全数把握からピックアップする仕組みを作ることにSSWerの重要な意義があるのではないかと思います。

## 課題別研究報告 第3分科会

大学におけるキャンパス・ソーシャルワークの現状と展望  
名城健二(沖縄大学)

今回、日本学校ソーシャルワーク学会(以下、学会)において、学会事務局長の鈴木先生の勧めがあり、初めてキャンパス・ソーシャルワークの分科会を開きました。分科会の参加者は30名程で、現任のキャンパス・ソーシャルワーカー(以下、CSWer)や今後キャンパス・ソーシャルワーカーの配置を検討している大学の関係者等であったと思われます。キャンパス・ソーシャルワークとは、大学内にて大学生を対象にソーシャルワークを展開することで、全国的に2006年以降に配置する大学が増え、現在は35校ほどの大学に配置されているようです。ただし、その全体の活動の実態は不明確な部分が多く、まだまだ大学内におけるソーシャルワーク業務の確立には至ってないと思われます。そのような中、学会を通し知り合ったCSWer10名程のメンバーにて、3年ほど前より相互の情報交換を開始しました。主にメールリング上でお互いの近況報告等を行っています。今回の分科会は、そのメールリング上でつながっているメンバーを中心に事前の準備と当日の運営にあたりました。

分科会の発表は、淑徳大学の米村美奈氏、四国学院大学の詫間圭子氏、日本福祉大学の國中咲枝氏と私の4名、コメンテーターに日本福祉大学の若山隆氏を迎え行いました。米村氏は、全国で積極的にCSWerを配置している10の大学のインタビュー調査から、各大学で務めるCSWerの国家資格の有無や雇用形態、待遇等を調査し大学におけるソーシャルワークの固有性を考察し発表しました。詫間氏と國中氏、私はそれぞれの大学の概要と特色の説明からCSWer導入の背景や業務内容、相談件数の具体的な提示、相談の傾向と特徴、今後の課題と展望を発表しました。いずれの大学もCSWerを導入した背景には、メンタル的に課題のある学生の対応や学習意欲の問題で退学する学生増が挙げられていました。発表後に一旦休憩を入れ、その間に参加者からの質問を質問用紙にて受け付け、それに答えるという形式で後半を進行しました。

質問の内容は、沖縄大学で取り組んでいるSSTの具体的な方法や日本福祉大学で取り組んでいるハラスメント防止の取り組みについて、各大学内におけるCSWerの認知度、CSWerの導入効果、スクール・ソーシャルワークとは異なるキャンパス・ソーシャルワークの固有性について等でありました。CSWerの導入については、大学内における福祉系や心理系の教員の尽力があったことや学生の相談件数が年々増加傾向にあることの説明がありました。特に議論されたと理解する内容は、将来のことを踏まえて、CSWerが支援する大学生の固有性についてどう考えるかというこ

とやキャンパス・ソーシャルワークの業務確立、業務指針についてです。ただし、このことについては時間的な制約があり十分な意見交換ができなかったように思えます。今回、初めての試みでありましたが分科会を準備した我々の予想以上に、参加した方々のキャンパス・ソーシャルワークに関する関心が高かったように思えました。分科会を通し、改めてCSWerの課題が多く散見していることを感じました。課題の一つは、雇用されているCSWerの身分が非常勤ということです。このことは分科会で話題になることはありませんでしたが、身分が不安定ということは、CSWerの業務確立においても大きな支障になります。CSWerが大学に必要な根拠やCSWerとしての価値や業務内容(指針)を整理、確立していくと同時に身分保証についても早急に検討していく必要性を感じました。

少子化に伴い、多様なニーズや課題を抱えた学生が大学に入学する時代になっていることでしょう。日頃、個人的にCSWerとして活動する中で、学生達が抱える課題の多くが家庭や生活環境を起因としていることを強く実感しています。このことが、全国的な傾向であることを前提とするならば、「人とその環境の相互作用」に着眼点を置くソーシャルワークの技術が小中高校にとどまらず、大学においても重要な視点、技術となることは間違いありません。今後、キャンパス・ソーシャルワークのネットワークでつながっている全国の仲間や多くの方たちと大学におけるソーシャルワーク提供の可能性について検討していきたいと思えます。

## 課題別研究報告 第4分科会 スクールソーシャルワーカーの効果的活用のための工夫と課題をさぐる 清水克修(明治学院大学)

本分科会では、スクールソーシャルワーカー(SSW)活用事業に主体的に取り組まれている3つの自治体の担当者をお招きし、その効果的な活用に向けた工夫・課題について報告いただいた。最初に、福岡県教育委員会の藤田氏(指導主事)によって、同県内においてSSWや配置校への支援体制が重層的に築かれ(例えば、市町村の教育事務所単位で行われるSSWへのスーパービジョンに加えて、より広域な地域を対象にしたSSW連絡会議や運営協議会の設置など)、それとともに本事業に対する各市町村教育委員会の主体的運用を促すしくみ作りが積極的に進められている状況などが報告された。

次いで、神奈川県教育委員会の古島氏(指導主事)より、県の財政状況が厳しい中、本事業が着実に拡充されてきた経緯や、SSWの活用をより確実なものとするべく今年度から新たに、SSWの配置に加えて、SSWが関わるケースについての情報整理などを担うことが期待される「スクールソーシャルワーク・サポーター」の配置が始められたことなどが報告された。

最後に、福島県本宮市教育委員会の宮地氏(SSW)によって、同市内における本事業の概況、氏自身がSSWとして市の正規(常勤)職員に至った経緯、さらには正規職員という立場のメリットとデメリットに関する見解などが示された。その中で、非正規時に比べて多方面にわたって援助活動をしやすくなった反面、組織にコミットする割合が増した故に生じることとなった葛藤や困難などについて報告がなされた。

その後、指定討論者として、本学会によるSSW配置に関する全国自治体調査(『学校ソーシャルワーク研究(報告書)』として2011年1月に発刊)の取りまとめにあられた法政大学の岩田氏に、先の3報告に対するコメントをいただいた。氏は、いずれの報告も、全国的にみて先駆的な実践例との印象を語られた上で、それにもかかわらず報告者それぞれの地域において課題を抱えており、その対応において工夫がなされている点に着目された。その一方で、それらの実践が、先駆的とは呼べない全国の多くの自治体にとってどのような意味を持つのかという視点も提示された。氏はまた、後に続くフロアとの質疑応答に関して、一般に教育委員会の指導主事側にもSSW側にも日頃の活用・活動に際して「困り感」を持っているはずであり、このような場を利用してそれらを吐露し意見を出し合うことで、お互いに解決のヒントが得られれば有意義なのではないかとの提案をされた。実際、これに促されるように、その後の時間では参加者間で率直な意見の交換がなされた。

ご発題いただいた3名による報告からは、それぞれの地域における援助事例の積み上げが着実に進み、SSWの導入効果を感じられている様子が看取された。しかし、すでに本学会内においても指摘されているように、援助事例の積み上げのみがSSWの雇用・活動環境の充実のための安定的な財源確保を約束するものではない。それには配置先の各自治体の主体的な関わりと、そのための体制作り・働きかけが不可欠であるように思われる。福岡県や本宮市が先進的と言われるのは、まさにこの点においてであり、また神奈川県をはじめ全国のSSW導入自治体における熱意ある担当者らが腐心されているのも、この点においてであろうことが窺えた。

SSW個々の実績が恒常的に組み込まれそれらが遍く共有される組織・体制を、どのように構築していくのか。そのためには何が求められ、また何を明らかにしていく必要があるのか。先進モデルと言われるものに対して、そこで展開される個別援助活動・技術や適正な配置、校内体制の整備など、いわゆるマイクロやメゾといわれるレベルのものだけではなく、それらを可能ならしめる、よりマクロに近いものにも注意を払っていく必要性を、本分科会を通して改めて認識させられた。

## シンポジウムを聞いて 1 帖佐加代(沼津市立金岡小学校)

今回のシンポジウムは、東日本大震災に遭われた皆さまへの黙とうから始まりました。福島で実践活動をされている鈴木教授からの黙とうの呼びかけは、とても深い意味を感じました。

私は、静岡県でスクールソーシャルワーカー活用事業が実施された年から3年間SSWRの活動をしましたが、現在は、特別支援学級の担任をしています。発達障害や虐待に関して、校内での情報交換や連携、または、児相や福祉事務所、病院など外部機関との情報交換や連携の必要はわかっていますが、うまくできないジレンマを感じる先生方もたくさんおられます。「ここに、SSWrがいたら・・・」と、以前連携したことのある先生方から声をかけられることもあり、SSWrには、子どもや保護者、学校に必要とされる特有な役割があると感じています。今回のテーマは、「学校づくりにおけるソーシャルワーカーの役割」でした。福島大学の鈴木庸裕先生から「学校ソーシャルワークにおける学校づくり論をめぐって～震災復興の道筋の中で～」、日本社会事業大学の山下英三郎先生から「スクールソーシャルワーカーと学校の再生」という2つの発題講演が行われました。

鈴木先生は、震災が地域にもたらした事実を私たちに語ってくださいました。「3月11日以降、地震・津波・放射能・風評の四重苦の話。災害によって可視化されたもの。つなぎ目の弱いモノが崩れた～。さらに、忘れさられて



いく・見捨てられるという五重苦がもたらされる状況にある。」また、「津波避難・計画的避難と避難所生活、子どもの全数把握を果たすことができたのは、唯一学校であった。」という話は、子どもを軸にして全数を知ることができるのだろうか、いのちをつなぐ学校として教師同士がつながっているのだろうか、子どもを取り巻く地域とつながりがあるだろうか、自問しながら聞いていました。そして「子どもと学校、家庭と学校、地域と学校との関係性。地域に子どもがいるから学校がある。地域に学校があるからこそ『含み資産』がある。」という話は、災害対応状況下におけるSSWの役割が非常に重要であること、今まで当たり前のようにあった、学校や行政機関が失われた地域で、ソーシャルワークを実践する難しさ、実践するSSWrの苦悩(重み)を感じました。

山下先生の講演は、「自分の事を考えるときは、世界のことを考えよう。世界の事を考えるときは、自分のことを考えよう。」という言葉から始められました。「子どもたちは、学校・家庭・地域の中で生活をしているが、それは、大人が作った枠組みの押しつけで、子どものニーズとズレが生じている。SSWrは、異なる視点の導入、ネットワークキング&仲介・調整、代弁者という役割が求められる。子どもを取り巻く大人(価値観の異なる機関)が、SSWrを介して対話することで、学校の再構築につながる。」と、学校再生とSSWについて話を進められました。子どもの最善の利益追求を対話(たぐさんの選択肢を提供)という手法を実践できるSSWrは、決められた枠組みではなく、人と人とが交流する貴重な居場所としての学校に変えて行くことができるのではないかと感じました。

山下先生は、マクロの仕組みが固定された学校の中で「自分らしく夢を描けない子ども」を支えるSSWR、鈴木先生は、「子どもが地域を育てるという視点」で、学校や行政機能というマクロの仕組みが失われた所へ働きかけるSSWrを提議されたように思いました。

一人職場であるSSWrが集まるとケース検討会になり、子どもの夢や願いを語る時間が無くなりがちです。今回改めて、ソーシャルワークとは何か。ミクロレベルの意識とマクロレベルの関わりを深さと考えさせられました。なにより、スクールソーシャルワークを異なる角度から、お二人の先生のお話を聞くことができたシンポジウムでした。「学校つくり」という、とても大きなテーマでしたが、学校に立脚したソーシャルワーカーならではのテーマであり、その役割を初心に戻って考えることができたように思います。子どもを取り巻く一環境要因としてこれからも研鑽を重ねたいと思います。ありがとうございました。

## シンポジウムを聞いて 2 横山明希(福岡県筑前町教育委員会)

本大会企画のシンポジウムとして二つの講演を聴き、それぞれのテーマにおいて感じたこと、更には共通して自分の学びとなったものがあります。

まず、発題講演1「学校ソーシャルワークにおける学校づくり論をめぐる―災害復興の道筋の中で―」においては、教師とスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの領域の重なりを大切にすることが必要であるという点を学びました。学校現場において、それぞれの専門性を持って子どもへの働き掛けを行う中で、領域を分けてしまいがちな面があると考えられます。しかし、重なり合わせることで子どもを取巻く環境は、より繋がりをもちつことではないかと感じました。災害対応スクールソーシャルワーカーの役割としては、今回の震災孤児のうち半数がひとり親家庭であったという情報に驚くと同時に、目の前にある災害後の学校教育としての対応だけでなく、その根底にある子どもの抱える問題への働きかけがとても重要であるとわかりました。また、児童相談所や生活保護だけでなく、多くの機関との連携や保護者や若者への就労支援といった、小中学生に留まらない多岐にわたる支援が求められていることを知り、スクールソーシャルワーカーの役割の大きさを感じました。

発題講演2「スクールソーシャルワーカーと学校の再生」において考えたことは、まず、子どもたちの抱える問題に対して、子どもたちの声に真摯に耳を傾けることが重要であるという点についてです。大人の枠組みを子どもに押し付けるというところで、学校現場においては問題行動に対して規則に沿った指導が行われている場面をよく見かけます。生徒の「何故、してはいけないのか」という問いに対して、「校則だから」という一つの枠組みを押し付けるのではなく、個別化した対応の必要性も感じました。二つ目は、学校の困難さとして、子どもを取巻く環境(家族や地域)の変化があるという点についてです。母子家庭やその他核家族、生活保護世帯の全国的な増加に伴って、子どもを取巻く環境は多種多様になっています。この状況の中で、学校では必然的に今まで同様の教育だけでなく子どもたちの周囲の環境の問題への関わりが必要となってきたとあらためて実感し、学校だけでなく関わりが重要であるとわかりました。

二つの講演から学んだこととしては、子どもの最善の利益を考えた支援というところを、揺るがぬものとして持つということです。スクールソーシャルワーカーにとって、誰のために活動をしているのかということや常に考慮する必要がありますと感じました。子どもの抱える問題に対する困り感としては、本人からというよりも教師や保護者からの相談が多く視点も寄りがちになってしまうかもしれません。しかし、子どもにとっての最善の利益はなにか、ということや基盤に置いた見方がとても重要であるということやあらためて実感しました。そして、そのために子どもを取巻く環境の中の人々、つまり保護者や学校の教師だけでなく地域や行政機関といった人々の、確かな繋がりや協働が求められるとわかりました。学校づくりというところで大きな変革を起こすことはできないかもしれませんが、歴史ある日本の学校教育文化において小さな刺激となり、子どもたちにとってより良い環境をつくり出すきっかけとなれることを考えました。今回のシンポジウムに参加して、このようにあらためて見直す、考え直す機会を得られ、大変貴重な経験となりました。

## 全国大会に参加して 中筋啓介(福岡市教育委員会)

私は今年度から福岡市でSSWとして勤務していますが、今回、初めて学校ソーシャルワーク全国大会に参加させていただきました。以前は、3年間障害福祉の分野で相談支援事業所で勤務していましたので、日々の業務の中で、まだ分からないことばかりで戸惑うことが多いのでこの2日間はとても有意義なものとなりました。

初日は基礎研修で、1つの事例に対して拠点巡回型と派遣型のアプローチの方法の違いを議論しました。派遣型のSSWの方とグループワークができたこともあり、派遣型からの視点を知ることができ、体制が違うだけで1つのケースの見え方やアプローチも大きく変わってくることを知ることができました。

午後の基調講演では自分が所属している福岡市のSSWの取り組み、シンポジウムでは学校ソーシャルワークの概要について改めて自分の中で整理する機会になったと思います。また、この日の夜は情報交換会もあり、全国のSSWの方々と間近で話すことができ、自分の事を知ってもらう良い機会になりました。ここでできたつながりを大切にしていきたいと感じました。

2日目は、研究発表で全国のSSWの方の取り組みを聞くことができました。事前に冊子を見ていて、どれも魅力のある内容ばかりだったので、全部をきちんと聞くことができなかつたのが残念でした。発表では、発表者とフロアの間でやりとりされる熱い議論に圧倒されました。午後は、第2分科会に参加させていただき、虐待対応について、今後SSWとしてどのような動きをしていくべきか、周りとのどのような連携をしていくべきか、自然と自分の担当しているケースを振り返りながら聞き入っていました。

2日間を通して、これまで自分が業務に携わる中で認識不足だった点を振り返ることや、全国のSSWの方々とつながりを持つことが出来ました。今後は日々の業務の中で学会で学んだことを生かしながら、一つ一つの課題に向き合っていきたいと思います。

## 連絡先

---

日本学校ソーシャルワーク学会 事務局  
960-1296 福島市金谷川1番地  
福島大学大学院教育学研究科 鈴木庸裕研究室気付  
TEL/FAX:024-548-8114  
メール:nsuzuki@educ.fukushima-u.ac.jp  
郵便振替:02230-7-67785